

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月20日現在

機関番号：35306

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520458

研究課題名（和文）メチェ語の再活性化のための記述研究と紙芝居を用いた実証研究

研究課題名（英文）A descriptive study of Meche and an experimental research of the usefulness of Kamishibai for language revitalization

研究代表者

桐生 和幸 (KIRYU KAZUYUKI)

美作大学・生活科学部・教授

研究者番号：30310824

研究成果の概要（和文）：ネパール東部ジャパ郡で話されている危機言語のひとつメチェ語（チベット＝ビルマ語ボド・ガロ語支）について、将来の言語活性化を念頭においた記述研究を行い、物語の書きお越しおよび文法分析を行い、特に動詞複合についてまとめた。6千語強の語彙を含む辞書を刊行した。その他、メチェ語とボド語の比較をまとめた。また、紙芝居を用いたメチェ語活性化活動の言語意識への影響を調査したが、継続的な活用には読み手の文字教育など問題点が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：Intended for a future revitalization program of Meche, a Tibeto-Burman language (Boro-Garo) spoken in Jhapa District of the eastern Nepal and one of the endangered languages in the country, I have given a more detailed descriptive analysis of the grammar on the basis of the folktales that were recorded and transcribed. I analyzed compound verbs and described some characteristic differences between Meche and Boro. A Meche dictionary with over 6000 headwords has been published. I examined effectiveness of the use of Kamishibai story-telling with picture cards for promotion of mother tongue awareness, and found some problems to solve for its future application.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、言語学

キーワード：危機言語の記述、辞書、言語活性化

1. 研究開始当初の背景

メチェ語はチベット＝ビルマ系言語のボド・ガロ語支に属し、ネパール東部ジャパ郡で話されている言語である。話者数は2000年の統計調査によると約3,300人で、ネパールにおける少数言語である。また、ネパール語の影響で若い世代への継承が行われなく

なりつつある危機言語でもある。本研究以前には、ネパール語－メチェ語の簡単な語彙集や本研究者が行った調査に基づく文法素描、語彙集、テキスト程度しかなく、危機言語に必要な文法記述、語彙、テキストのいっそうの整備が望まれる状況にあった。

2. 研究の目的

(1) 本研究が前年度までに行った若手研究の成果をもとに、メチェ語の文法記述、語彙の収集、および、テキストの整備を行うことである。物語を中心としたテキストの書きお越しと文法分析を行う。

(2) メチェ語の近親言語であるインド・アッサム州のボド語との比較研究を通じ、メチェ語の特徴を探る。

(3) メチェ語再活性化のために紙芝居を用いた言語普及活動の有効性の実証研究を行う。

3. 研究の方法

(1) これまでに得られたデータをさらに分析するとともに、新しい物語データの録音と書きお越しを行い、これらのデータに基づいて、文法体系全般の記述を深める。特に、動詞の担う文法範疇であるテンス、アスペクト、モダリティについて、また、動詞複合について重点的に調査を行う。細かい文法性については、インタビュー調査によって分析を行う。

(2) 物語の書き起こしについては、これまでの分析に基づき正書法を確定し、それに基づいて協力者を訓練し、書き起こしに協力をしてもらう。

(3) 書き起こした物語中の語彙を整理し、辞書データの基盤とする。また、物語を簡素にまとめ、紙芝居の原本とする。紙芝居は、美作大学短期大学の学生の協力を得て、製作を行う。作成した紙芝居を現地において実演し、子供達の理解度や母語への関心の変化についての調査を行う。

(4) インド西ベンガル州北部およびアッサム州東部の連続する地域の村々を回り、語彙および音声の調査を行い、メチェ語とボド語の差異を明らかにする。

(5) XML ベースの辞書用語彙データをインターネット上で共有し、データの入力とチェックを本研究者と協力者との間で行い、それをもとに辞書データを作成する。

4. 研究成果

本研究の目的に沿って調査研究を行った成果について、以下にまとめる。

(1) 近親言語であるボド語は、デーヴァナーガリー文字を用いているが、ボド語の正書法をそのままメチェ語の表記に用いることには問題があるので、同じ文字を使う、なじみの深いネパール語の表記法にある程度準拠しながら、メチェ語のデーヴァナーガリー文字の正書法を考案し、それに基づいて書きお越し、辞書作成を行った。

(2) ジャパ郡メチェ 10 村落における言語使用状況を現地の協力者の協力の下、行った。その結果、12 歳以下の子供が日常的にメチェ

語を用いているのは 10 村落中 2 村落しかなく、ほとんどの村で日常的に親が子供にネパール語でしか話しかけていないことがわかった。

(3) メチェ語の物語を 4 編を記録し、書きお越しを行った。書き起こした物語は、ローマ字転写によるテキストデータベースとして、検索分析が可能のように整備した。

また、以前に書き起こした 3 編の物語とあわせて、データ分析を行い、複合動詞についての分析を行った。

複合動詞の分析についての概要は以下のとおりである。

① メチェ語の動詞形態は PROH- [[CAUS-[V1 V2] -VE] -TAM (PROH: prohibitive, CAUS: causative, V1: first verb, V2: second verb, VE: verb explicator, TAM: tense-aspect-modality) の構造を持つ。メチェ語では、動詞の先頭に禁止を表す接頭辞 *da-* が付く。動詞の語根よりも前に、使役接頭辞 *phV-* または *chV-* が付く (V は母音)。動詞末には、テンス、アスペクト、モダリティが融合的に表される接尾辞が一つ付く。TAM 語尾は重複して用いられることはない。

② V1-V2 の部分は、語彙的複合である。V1 と V2 の組み合わせとして最も多いのは、V1 が様態をあらわし、V2 が結果を表す結果複合動詞である (ex. *su-that* [刺す-殺す] 刺し殺す)。

③ VE は、verb explicator と呼ぶものであり、i) Aktionsart、アスペクト、ii) 方向、iii) 動作の様態、iv) 動作の程度、v) ヴォイス、vi) モダリティ、vii) 強意を表す言葉が入る。これらは、それ専用の拘束形態素であったり、動詞が文法化したものが入る。

以上のことは、2011 年の第 17 回ヒマラヤ諸言語学会において発表を行った。

(4) 書き起こした物語の語彙データ、および、インフォーマントがこれまでに集めていた語彙データをもとに、見出し語約 6300 語に及ぶ初の Meche-Nepali-English Dictionary を 240 部印刷製版し、2012 年 3 月にネパールにおいて、研究成果の社会還元の一環としてメチェの人々に無料で配布した。

辞書データは、XML 形式のテキストデータに、語彙、発音、語義、例文、ネパール語訳、英語訳を付け、最終的に XML から LaTeX 形式のデータに変換し、組版後、PDF データを作成し、製版をネパールの印刷所において行った。

辞書は、十分な時間が取れなかったこともあり、まだ、修正が必要な部分もあるが、辞書が出版されたことで、メチェ族の母語に対する意識の向上につながることを期待される。

(5) メチエ語とボド語の違いについて、2010年と2011年にアッサム州 Kokrajhar 市、および、西ベンガル州北部の7村 (Hashimara, Ranggaribajana, Narsingpur, Odlabari, Tiplajot, Salugara, Naxalbari) において、基礎語彙 30 語についての調査を行い、これらのデータをネパールの2村 (Ghodamara, Jalthal) のデータと比較し、メチエ語とボド語との連続性について比較分析を行った。①その結果として、音韻的な差が見られ、これらは規則的な対応をなしていることがわかった。特に、メチエ語に存在する歯茎破擦音 /ch/ がボド語には存在せず、すべて、ボド語では /s/ に対応すること。また、Joseph & Burling (2006) のボド語、ラバ語、ティワ語における音素比較による Proto-Boro-Garo (PBG) の再構築音として *s と *sh を立てているが、後者はメチエ語の ch に対応することがわかった。さらに、Proto-Tibeto-Burman のレベルまでさかのぼると、メチエ語の ch は、*ts~ty~ti に対応することがわかる。このことから、PBG における再構築音は、*sh よりも *ch を立てるほうがより妥当性が高く、歴史的に ch → sh → s という変化を想定することが可能であると言える。

②その他、接頭辞において、b-ph の対立がメチエ語・ボド語において見られる、ボド語には t の反り舌音が音素として存在しないが、メチエ語には存在する (ただし、1 対しかミニマルペアがない)。メチエ語の音節末子音 /t/ や /d/ がボド語では /r/ に対応することなどがわかった。

以上のことは、2012年度の美作大学・美作大学短期大学部紀要にまとめ、発表した。

(6) 美作大学短期大学部の学生の協力を得ながら当初は紙芝居を5編ほど制作する予定であったが、最終的に Dudbir Dudubir (ドゥッドビール、ドゥドゥビール)、Gorchikha Barai (すずめのおじさん)、Mokhrabir (勇敢なサル) の3篇を紙芝居化し、現地において、子どもに紙芝居を披露し、どの程度の理解をしているか、また、メチエ語に対する意識に変化があるかをパイロット調査した。

Ghodamara 村において、10人の子ども(10歳2人、8歳3人、4~6歳5人)を対象にメチエの協力者に物語を紙芝居で数回読み聞かせを行った。その後、子ども達に内容についての簡単な質問を行い、理解を確かめたが、年齢の低い子どもほどほとんど理解できていないことが分かった。また、10歳の子どもでも、おおむね半分程度の理解しかないと分かった。しかし、子ども達は分からないなりに紙芝居に真剣に聞き入っていた。結局、最終的には、書かれたものをそのまま読むのではなく、読み手がそのつど簡単にネパ

ール語も交えながら解説し読み聞かせることで理解度が上がった。

その後、他の村においても紙芝居を配布し、子どもを集めての実証研究を行うことを画策したが、問題点が判明し、十分に実行することができずに終わった。それは、読み手側の問題であり、もともと文字化されたメチエ語を読む習慣がないため、読み手に正書法を理解してもらい、さらに読む訓練をかなりしないといけないということである。Ghodamara 村の読み手は、物語の書き起こしに協力し、正書法にも十分なじんでいたため、物語りを読むのに困難がなかった。

しかし、そうでない場合、ほとんどまともに読むことができず、10分で終わるものが30分以上かかるなど、理解度の高くない子どもはさらに物語を理解できず、紙芝居に飽きてその場を離れるということが見られた。

結果的に、紙芝居による意識向上はある程度の効果はあるものの、読み手の読むスキルをまず訓練する必要がある大いにあるという結論に至った。

最終的に、物語を紙芝居の絵とテキストをもとに絵本を作成し、3村落に配布してきた。また、書き起こした7編の物語を正書法に従って冊子体にしたものも配布した。今後の研究においても、紙芝居と絵本を積極的に配布し、日常的に正書法が広まる活動が必要とされる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

[1] Kiryu, Kazuyuki. "Western Boro dialects in Nepal and northern West Bengal". 美作大学・美作大学短期大学部研究紀要、査読有、第57号、2012年、pp.9~18.

<http://mimasaka.jp/library/themes/pdf/bulletin/2012/pdf/455710009G.pdf>

[学会発表] (計2件)

[1] Kiryu, Kazuyuki. "A classification of verbal compound in Meche". 17th Himalayan Language Symposium. 2011年9月9日、神戸市外国語大学.

[2] Kazuyuki Kiryu. "Grammaticalization of the nominative marker into a discourse marker". 5th North East Indian Linguistics Society. 2010年2月14日. ドンボスコ研究所(インド・グワハティ市)

[図書] (計1件)

[1] Meche, Santa Lal and Kazuyuki Kiryu.

The Council of the Meche Language and Literature, *A Dictionary of Meche-Nepali-English*. 2012年、450 ページ.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

桐生 和幸 (KIRYU KAZUYUKI)

美作大学・生活科学部・教授

研究者番号 : 330310824